

阿部謹也と歴史学の革新

「戦後歴史学」の閉塞状況を背景に、日本では1960年代末葉より、歴史学において新しい潮流が現れました。従来の歴史学では、政治史や経済史が中心に据えられ、歴史観としては歴史の法則性や必然性が追究され、発展段階論的な見方が強かったのに対し、「新しい歴史学」は別の方向性を提示しました。その特徴としては、政治や経済に限定せず人間のあるゆる活動に関心を寄せる視座、単線的でなく紆余曲折を伴うダイナミックな歴史観が挙げられます。そこでは、民衆や女性というカテゴリーを通じ、今まで歴史の舞台ではあまり光の当てられることのなかった者たちの歴史に目が向けられ、食物や住居、性愛、犯罪、教育などの日常生活を構成する諸側面が積極的に掘り起こされました。こうした流れのなかで1970年代後半には、社会史が「新しい歴史学」として一般的にも認知されはじめました。1982年に阿部謹也、川田順造、二宮宏之、良知力を編集同人とする雑誌『社会史研究』が創刊されたのは、象徴的な出来事でした。



現在の歴史研究は、それら「新しい歴史学」の成果を受け継いでおり、これに批判的な立場をとる場合でも、その問題提起的かつ革新的な歴史研究のあり方は、無視できないものといえるでしょう。

研究対象とする国や地域、時代ばかりか、学問・専門分野をさえ問わず、「人間の過去の営みを記述する」者たちによって1970年代後半から1980年代にかけて共有されたのは、どういった考え方・態度だったのでしょうか。彼らの革新性は、どこにあったのでしょうか。本企画展示では、歴史研究のあり方に本源的な問いを投げかけ、1979年より約20年にわたって一橋大学社会学部で教鞭を執った阿部謹也元学長の業績を中心に、その歴史学の革新性に迫りたいと考えます。



◆ 展示

日時：平成19年11月2日(金)～9日(金)

11月12日(月)～15日(木)

9:30～16:30 (閉室 17:00)

場所：附属図書館 公開展示室(入場無料)

◆ 講演 「阿部先生の社会史研究と一橋大学の伝統」

講師：土肥恒之(一橋大学大学院社会学研究科教授)

日時：平成19年11月12日(月) 14:00～15:30

場所：西キャンパス本館26番教室

(入場無料・事前申込不要)

1. 歴史家の生と研究

「それをやらなければ生きてゆけないと思われるようなテーマ」

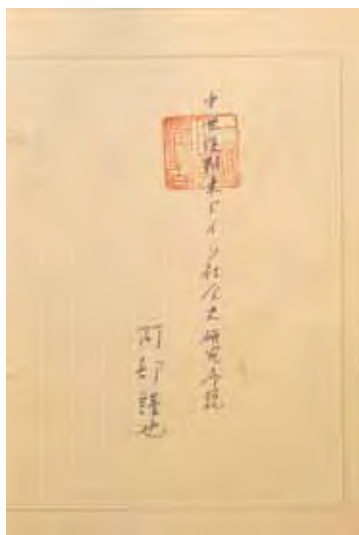
阿部謹也のエピソードとして最も知られているもののひとつに、卒業論文に取り掛かる際に、指導教官の上原専禄（1899－1975）より運命的な言葉をかけられた、というものがある。論文の主題を決めかねていた阿部に対して上原は、「どんなテーマを選んでも良いが、それをやらなければ生きてゆけないと思われるようなテーマを選ぶべきでしょうね」と助言を与えた。当時大学3年生であった阿部は、そのあまりに重みのある言葉に圧倒されながらも、「少なくとも私には何かを考えなければ生きてゆけないということははっきりとしていた」と自伝で回顧している。彼が、自身の人生に対してある強い確信を持ち、心を決めた瞬間であった。



上原専禄

阿部は、上原専禄のこの言葉を生涯抱き続けたという。確かに、その業績を振り返るとき、阿部本人の生と研究がきわめて密接に結びついており、自身の「解りたいと切実に思う個人の関心」に生涯こだわり続け、一研究者としてと同時にひとりの人間として真摯かつ誠実な態度を貫いたことがおのずと分かる。

阿部は1958年に上原専禄の指導のもと、卒業論文「ドイツ騎士団史について」を仕上げ、社会学研究科に進学した。1960年に増田四郎（1908－1997）の指導のもと、修士論文「初期ドイツ騎士団史の研究」、1963年には博士課程単位修得論文「中世後期東ドイツ社会史研究序説」を執筆した。また修士論文に付録として4枚の地図（エルサレム、アッコ、1230－1310年および1310－1466年のプロイセンの地図）が添付されていることは、自身の方法についてこの時点ですでに本人が自覚的であったことを示している。



博士課程単位修得論文



東プロイセン州の地図
(1912)

プロイセン (1310－1466) の地図



2. 『ハーメルンの笛吹き男』の世界

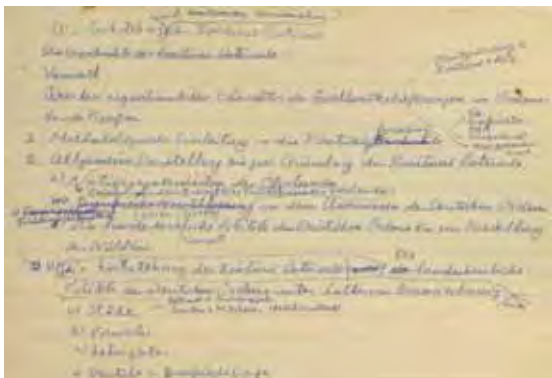
鼠捕り男 Rattenfänger に出会うまで

自身にとって生を賭けるに値すると思われるほど切なるテーマを追求し続けることを決め、これを貫いた阿部の誠実な態度は、その学問的方法論にも共通して見られる。大学院在籍当時、学界を席捲していた大塚史学にどうしても共感できなかった阿部は、それら既存の歴史概念や用語に頼らないことを決め、何よりも自分の正しいと信じ、納得のいく研究方法を模索していた。

修士論文を執筆するにあたって阿部はまず、騎士修道会時代のオステローデ地域の全体像を描くため、測量用の地図をドイツから取り寄せた。25,000分の1の縮尺で作られた地図はオステローデ全体で45枚に上り、下宿の6畳間でつなぎ合わせると天井まで届いた。彼はその真ん中に座布団を敷いて座り、地図を読んだという。文字で残された歴史を映像として再現するかのように、史料の記述に基づいて、ある地域で起きた過去の出来事および人間どうしの関係を地図に書きこみ、それを眺めることで過去に接近する阿部独自の方法であった。彼はこの頃より自身の方法に確信を持っていたと推察されるが、これを完全に実践するには、原史料にあたる必要があり、その機会を待っていた。文書を現地で読みこなせる語学力を養い、自身の研究の方向が定まってから、ドイツに向かうことを計画していたのである。

阿部がドイツへ向かったのは小樽商科大学助教授に就任してのちのことで、1969年末から1971年までの2年間を現地での史料調査に費やした。ゲッティンゲンの州立文書館でひたすら原史料を読み解いた成果は、*Die Komturei Osterode des Deutschen Ordens in Preussen 1341-1525* (1972) と『ドイツ中世後期の世界』(1974) に結実している。しかし、懇望し続けたこの土地が彼に与えたのは、そればかりではなかった。

文書館で東プロイセンの古文書史料を調査し、併せて近年の研究を読み進めていた阿部は、ある指摘に遭遇した。それによれば、オステローデのサッセン地方に、ハーメルンの笛吹き男に率いられた子どもたちの入植した可能性があるという。阿部は背筋に何かを感じるのを感じ、「古文書の解読と分析に多少疲労していた私の頭は、それまでの単調な仕事からの息抜きを求めてあつという間に想像の羽をひろげていった」と振り返る。彼はこの瞬間に、伝説のまさしく舞台であった異国の地で、幼少期に読んだ『ハーメルンの笛吹き男』の世界と不思議な再会を果たしたのである。



手稿：Die Komturei Osterode (左) 『ドイツ中世後期の世界』(右)

歴史的事実と伝説のあいだ

この日以来、阿部は本来の研究と並行して、ハーメルンの笛吹き男に関する調査に没頭した。130 人の子どもたちが 1284 年 6 月 24 日にハーメルンの町で行方不明になったことが歴史的事実であると判明すると、「伝説の探求」に対しても彼の研究方法は等しく有効であった。最初に笛吹き男の世界に出合った際のそれとは違い、「深い持続的な興奮」に包まれた阿部は、自身の関心が何に向かっているのかはつきり自覚していた。それは、伝説の検証でも謎解きでもなく、100 人以上もの幼い子どもたちが行方不明になったという異常な出来事の背後にある、当時のヨーロッパ社会における庶民の生活であった。また、良知力の言葉を借りるならば、「歴史的「事実」を時間の中で濾過させながら「伝説」に昇華させていった民衆の意識の必然性」を明らかにすることでもあった。【引用：良知力「伝説をとおした中世賤民像」『月刊エディター：本と批評』第 60 号（1979.9）、14 頁】



『ハーメルンの笛吹き男』
(1974)

既存の歴史概念では捉えきれず、従来の歴史学の方法では再構成できない過去の世界、そこに生きた人々の「思考世界」に阿部は惹きつけられ、何とかしてこれに近づきたいと思う。今では歴史的事件の英雄たちに隠れてしまったその他大勢の民衆の姿、注意深く耳を傾けなければ聞こえてこない、かき消された民衆の声を掘り起こし再構成する歴史学に、彼は向かっていた。阿部は笛吹き男の研究を、自身の研究生活のなかにおける「小さな花」と呼び、何かしら特別な思いを抱いていたようであった。



鼠捕り男の家と舞樂禁制通り
(1898 年頃)

書店や図書館の書架に「～の社会史」「～の文化史」と題された本のあふれている現在では、価値あるいは重要性の有無をめぐる議論を超え、人間の生を再構成する多様な試みに対して、さほど違和感を覚えないかもしれない。しかし 1970 年代当時の学問的状况において、阿部の『ハーメルンの笛吹き男』の与えた衝撃がいかなるものであったか考えるとき、私たちは敬服の念を覚える。阿部の実践した歴史学は、歴史研究のあり方に本源的な問いを投げかけ、「解りたいと切実に思う個人の関心」は徐々に学界全体に響く声となっていった。膨大な原史料に忠実に基づき、瑣末とされてきた過去の断片をもすべて拾い集めて描かれた阿部の中世ヨーロッパ世界について、日本近世史家の吉田伸之は、「中世ヨーロッパの自由都市イメージが、本書〔ハーメルンの笛吹き男〕によってかなりの修正を迫られているのではないかと評した。【引用：吉田伸之「阿部謹也著『ハーメルンの笛吹き男』を読んで」『歴史評論』第 321 号（1977.1）、51 頁】

IXAR DER ZG VNII DORCH EINEN PIPER MIT ALLERLEI FARVE BEKLEDET GEWESEN CXX

鼠捕り男の家に刻まれた、1284 年 6 月 26 日の出来事を伝える碑文

3. 「新しい歴史学」の黎明

『社会史研究』を編んだ同人たち

阿部が『ハーメルンの笛吹き男』を発表した1970年代には、彼と同じく、従来とは異なる新しい視座から人間の生を再構成しようと試みた者たちが存在していた。ここでは、のちに『社会史研究』（1982-1988）の編集同人として阿部と名をつらねる3氏について紹介したい。

西洋史家の二宮宏之（1932-2006）は当時とくに、リュシアン・フェーヴルの歴史観に強い関心を寄せていた。フェーヴルは、1929年にマルク・ブロックとともに、アナール学派の由来となった『社会経済史年報』*Annales d'histoire economique et sociale*を創刊した人物である。二宮が共鳴したのは、個々の史実を確定することに終始してそれらの連関性を問わない歴史学を問題視し、複眼的な眼を持って社会を「深層」において捉えようとする、フェーヴルの「全体史」への志向であった。二宮は、この「全体を見る眼」を常に意識し、近世フランスにおける権力の構造を明らかにしようとしていた。

社会思想史家の良知力（1930-1985）は『向う岸からの世界史』（1978）のあとがきで、同書の意図は、「これまで自分が無自覚に依拠してきた歴史の見方や歴史的概念を根底から洗い直すこと」にあったと書いている。「近代主義的」「大国主義的」「図式主義的」史観など従来の歴史観とは距離を置いた彼は、それとは異なるベクトルを持つ歴史観を展開しようと考えたのであった。同著作では、1848年革命を描くなかで、プロレタリアートと呼ばれた「未定型な流民」を「形象化」（傍点は引用者）することが試みられている。

文化人類学者の川田順造（1934-）もまた、従来の歴史学に対し、深刻な疑問を呈したひとりである。彼の『無文字社会の歴史』（1976）は、文字資料を偏重して人間や社会を研究してきた者すべてにとって、大きな衝撃であった。なるほど、文字による過去の記述だけが「歴史」と認められるならば、未だかつて文字を持たなかった者たちは、いっさいの歴史を持たないことになってしまう。必ずしも文字によらずとも、伝承や遺物によってとどめられた人間の生および社会の形態が存在し、それらを再構成する試みは無駄な営為ではないはずだという強い思いが、川田を突き動かしていた。



二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』（1986）



『社会史研究』（1982-1988）



良知力『向う岸からの世界史』（1978）



川田順造『無文字社会の歴史』（1976）

日本史における新たな潮流

日本史の分野では、すでに 1920 年代に「社会史」という言葉が用いられ、1922 年には雑誌『民族と歴史』が『社会史研究』へと改称している。しかし今日一般的に社会史という用語が指すのは、1970 年代後半に登場した研究動向だと考えてよいだろう。

この新しい潮流を牽引したのが、網野善彦（1928－2004）である。遍歴する非農業民に注目して作り上げたその歴史像は、それまでの農民中心史観を根底から覆し、「網野史学」という言葉までも生んだ。代表作に、中世の遍歴民を支えた「無縁」の原理—所有や支配といった世俗の縁の対極にある関係原理—の存在を主張し、その盛衰を論じて学界の内外に大きな影響を与えた『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』（1978）がある。作家の隆慶一郎や、宮崎駿の映画「もののけ姫」に影響を与えたことでも知られている。



中世の人々の意識に迫る網野の研究は笠松宏至（1931－）・勝俣鎮夫（1934－）らの法意識・法慣行の研究と近接し、中世史家石井進（1931－2001）を含む 4 名によって『中世の罪と罰』（1983）が編まれた。一般的な知名度は網野に及ばないとはいえ、笠松・勝俣・石井もそれぞれ代表的な社会史研究者として、その研究は高く評価されている。

網野はまた絵画史料にもアプローチし、1986 年に『異形の王権』を上梓した。本作は絵画史料を利用した優れた研究のひとつとして知られるが、この分野を開拓したのが、黒田日出男（1943－）である。絵図や絵巻を読み解いた先駆的な著書『姿としぐさの中世史—絵図と絵巻の風景から』（1986）以後、肖像画・屏風絵へと対象を広げて精力的に成果を発表している。

網野は社会史の代表的な論者として阿部と並び称され、両者は数度にわたり対談を行った。その一端は『中世の再発見』（1982）に収録されているほか、阿部・網野・石井・西洋史家樺山紘一（1941－）の 4 名による座談会の記録も『中世の風景』（1981）として刊行されている。対談が両名に与えた影響は大きく、その成果は網野の『無縁・公界・楽』や阿部の『中世を旅する人びと』（1978、サントリー学芸賞受賞）・『中世の窓から』（1981、大佛次郎賞受賞）といった彼らの代表的著作に盛りこまれた。両名は互いの知的交流によって視野を拡大し、それぞれ自身の歴史学を深めたのである。



4. 一橋大学の学問的背景

縦と横の座標軸

連綿と続く一橋大学の学問的伝統と「新しい歴史学」のあいだには、そもそも融和的な関係がいくつか認められる。『一橋の学風とその系譜 2』（1985）に収録された「一橋歴史学の流れ」（1982）で増田四郎は、高等商業学校時代の中期にあたる 1895 年ごろに、これの原型が形成されたとし、その特徴を「政治史中心だとか、皇国史観だとか、国家の制度だとかそういうものではなしに、庶民生活に即した商業史、工業史」に見ている。増田自身も地域史の提唱者であった。このように、一橋大学の歴史学の伝統は、「新しい歴史学」と同じく、歴史学を狭く政治史に限定しない傾向を備えていたのである。また、本学で教鞭を執った三浦新七（1877-1947）やその弟子の上原専禄に共通する、世界的・全体史的志向も忘れてはならないだろう。



増田四郎「西洋史講義」手稿



佐々木潤之介
『世直し』（1979）

大勢の研究者のなかから出てくる学問的な雰囲気、学風の存在することは確かであり、とりわけ本学ではその強調されることが少なくない。しかし、「新しい歴史学」や社会史に対する、学内の研究者たちの態度は必ずしも一様でなかったことも事実である。阿部と同時期に本学社会学部に籍を置いた、佐々木潤之介（1929-2004）と安丸良夫（1934-）の社会史に対する態度の相違は、好例であろう。

佐々木潤之介（日本社会史）の「社会史」批判は、よく知られている。佐々木は、1930年代のマルクス主義史学における社会史などとは区別される、括弧つきの「社会史」にとって致命的なことは、それに「社会」の欠落している点であると主張する。「社会史」の面白さは「知識供給の面白さ」であると断言し、社会の欠落した「社会史」は歴史学からほど遠いという。また「社会史」には「歴史の総合」といった側面が弱いことも、批判の根拠であった。彼にとって本来あるべき社会史とは、

「国家史の諸問題をもくみこんだ民衆史」であった。【参考：佐々木潤之介「『社会史』と社会史について」『歴史学研究』第520号（1983.9）、31-37、61頁】

対して安丸良夫（日本思想史）は、「理念化された近代思想像に固執してそこから歴史的对象を裁断するモダニズムのドグマ」に批判的であった。そのようなドグマに陥った視点からは、支配者たちの思想は見えてきても民衆については困難で、明らかにされる場合でも、ネガティブな評価の圧倒的なためである。しかし彼にとって、歴史を突き動かす根源的な力は民衆の側にある。そこで安丸は『日本の近代化と民衆思想』（1974）の目的を、「民衆の生き方・意識の仕方」を通して、日本の近代化過程の意味を考えなおすことに求め、従来の「近代化論」や「国家主義的歴史観」に根底から見直しを迫った。この点で、阿部や網野の社会史にも深い理解を示したといえる。



安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』
(1974)

阿部謹也元学長略歴

- 1935年 2月19日 東京都千代田区に生まれる。
- 1941年（6歳） 4月 鎌倉第一国民学校入学。
- 1947年（12歳） 4月 中野区立第五中学校入学。
カトリック修道院の寮に入る。入寮から1年後、洗礼を受ける。
- 1949年（14歳） 修道院の寮を退寮して実家へ戻り、練馬区立石神井西中学校へ転校。
- 1950年（15歳） 4月 東京都立石神井高等学校入学。
- 1954年（19歳） 4月 一橋大学経済学部入学。
- 1956年（21歳） 上原専祿ゼミに入る。上原ゼミでハインペル『人間とその現在』(H. Heimpel, *Der Mensch in seiner Gegenwart*, 1954)に出会う。
- 1958年（23歳） 3月 一橋大学経済学部卒業。
4月 一橋大学大学院社会学研究科進学。
- 1960年（25歳） 3月 修士号取得（指導教官 増田四郎）。
- 1963年（28歳） 3月 博士課程修了（指導教官 増田四郎）。
- 1964年（29歳） 8月 小樽商科大学講師となる。
- 1966年（31歳） 10月 小樽商科大学助教授に昇任。
- 1969年（34歳） 10月 フーバッチュ教授の勧めにより、フンボルト財団の奨学生として2年間のドイツ留学。
- 1970年（35歳） ボンからゲッティンゲンへ転居。午前は国立文書館、午後はゲッティンゲン大学図書館で史料を解読する日々を送るなかで、ハーメルンの笛吹き男の資料に出会う。
- 1971年（36歳） 秋 帰国。
- 1972年（37歳） *Die Komturei Osterode des Deutschen Ordens in Preussen 1341-1525* を出版。
11月 『思想』（岩波書店）に後の『ハーメルンの笛吹き男』の原型となる論文「ハーメルンの笛吹き男伝説の成立と変貌」を掲載。
- 1973年（38歳） 10月 小樽商科大学教授に昇任。
- 1974年（39歳） 7月 『ドイツ中世後期の世界—ドイツ騎士修道会史の研究』を出版。
10月 『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界』を出版。
- 1976年（41歳） 4月 東京経済大学教授に就任。
- 1979年（44歳） 4月 一橋大学社会学部教授に就任。
- 1982年（47歳） 10月 川田順造、二宮宏之、良知力とともに『社会史研究』を創刊。
- 1987年（52歳） 4月 一橋大学社会学部長に就任（～1989年3月）。
- 1992年（57歳） 12月 一橋大学学長に就任（～1998年11月）。
- 1995年（60歳） 6月 国立大学協会副会長に就任。
- 1997年（62歳） 11月 国立大学協会会長に就任（～1998年11月）。
- 1998年（63歳） 11月 一橋大学を退官。同時に名誉教授の称号を受ける。
- 1999年（64歳） 4月 共立女子大学学長並びに学校法人共立女子学園理事・評議員に就任（～2002年3月）。
『阿部謹也著作集』刊行開始。
- 2006年（71歳） 9月4日午後9時37分、急性心不全により東京都新宿区の病院にて逝去。



一橋大学附属図書館

2007年11月2日発行

〒186-8602 東京都国立市中2丁目1番地

URL : http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/index_Ja.html

TEL : 042-580-8252 (学術情報課 学術・企画主担当)

FAX : 042-580-8232 (学術情報課)

※本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館に属します。著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。

本企画において、本学社会学研究科土肥恒之教授・阪西紀子准教授にご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。